

フィリピン英語の特徴

—タガログ語からの言語干渉—

小野原 信 善*

はじめに

1969年Llamzonは、当時のフィリピンで使用されている英語を固有の特徴をもつ一変種と見なす提案を行った。英語を構成する ‘Englishes’ のgalaxyに、アメリカ英語、イギリス英語、オーストラリア英語、カナダ英語、シンガポール英語等と同列に、フィリピン英語も参入出来るかと指摘した。小論では、そのようなフィリピン英語の特徴を検証するのを目的とする。その特徴は音声・音韻レベルのものから語彙・文法の段階に至るもの、更には談話の分野に至るまで散見される。その内、Llamzonは特定のlexical itemsやcollocationsをFilipinismsと呼び、その特徴を挙げた。これを契機に、フィリピン英語についてHidalgo (1970) やGonzalez (1978,1983) らによる批判や拡大解釈が生じた。とりわけ、Gonzalez (1983) による音声・音韻・語彙のレベルに於けるフィリピン英語の例示・列挙には目を見張るものがある。即ち、これらのレベルでは数多く存在する諸土着語（主としてタガログ語から）の影響に基づいた特徴を見ることが出来る。他方、文法のレベルでの特徴も挙げられているが、そこにはタガログ語からの影響がどのように関係しているのかは必ずしも定かではない。このことは、言語や文化の影響を大きく受けるのは音韻や語彙の側面であるのに対し、統語レベルはそれ程大きな影響を受けない、ということに結論づけられるかも知れない。即ち、フィリピン英語の統語上の特徴は標準アメリカ英語とそれ程大きな異りはないといえることになる。しかし、それでも尚、統語上の形態や機能が“異なる”のに気づく。それはフィリピンを訪れた人達が体験することでもあるし、又、昨今の衛星放送を通じた、フィリピンの英語ニュースを聞いても感じられる。小論ではGonzalez (1983) による統語上の特徴づけで不足していると思われるもの、とりわけ、タガログ語からの言語干渉をとり挙げ、Jennings (1984) らを参照しつつ、そこでの例示を補うと共に、理論的根拠を示そうとするものである。

第一章では、謂はゆる“標準フィリピン英語”について小野原 (1995a) に基づいて整理する。

第二章では音声・音韻・語彙レベルでの特徴をGonzalez (1985) を中心に幾つか眺める。そして第三章に於て、小論の主たる目標である統語上の特徴を、タガログ語の構造との関連で対照的に眺める。そうすることでフィリピン英語の総合的な提示の一翼を担おうとするものである。

1 フィリピン英語の定義

1. 1. Llamzon (1969) は音韻と統語レベルに見出せる特徴を調査した後、フィリピン英語について次のように記述した。そして、それを Filipinisms と名づけた⁽¹⁾。

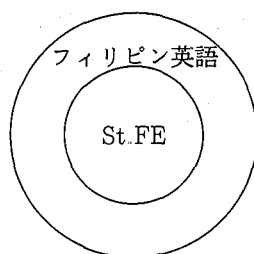
*教授 教育学部 (英語学)

English expressions which are neither American nor British, which are acceptable and used in Filipino educated circles, and are similar to expression patterns in Tagalog.

更に次の如くにも述べた²⁾。

.....StFE was understood by other speakers of English internationally, and was considered 'good English' by the speech community.

即ち、アメリカ英語でもイギリス英語でもない変種で、教養あるフィリピン人エリートによって使用されている英語で、国際的にも充分通用する類のものであるとした。そして、それを 'Standard Filipino English' (以下、St.FE で表記する) と名づけた。その特徴はタガログ語の表現を反映しているとした。とは云え、タガログ語と英語の表現を mix した謂はゆる halo-halo English とは質的に異なることも指摘した。halo-halo English は mix-mix Englishとも呼ばれるが、その内実は両言語の要素を混合して用いる英語であり、英語に力点が置かれる場合 (Engalog) とタガログ語の要素が優勢な場合 (Taglish) に分けられる。いずれにせよ、その特徴とする点は、両言語に通じた者による発話ではなく、片方の言語に頼った言語使用というところに特色がある。つまり、発話の過程で不規則的に両言語の要素を混合し、体系をも mix してしまうのである。従って、これは、英語を学習する過程にある者が、未だ目標言語である英語を十分に操れない段階でタガログ語に頼った結果現われる習得途次言語 (inter-language) の段階であると位置づけることも出来る。それに対し、Llamzon流のSt.FEはタガログ語の表現形式に類似してはいるが、タガログ語自体は含まないところにその特色がある。だからこそ英語を話す外国人にも国際的に理解されるという根拠の一部を形成することにもなる。LlamzonのSt.FEについての批判は幾つかあるが、中でもGonzalez & Alberca (1978) のそれは、フィリピンの言語状況を端的に物語っている点で面白い。それによれば、フィリピンにはタガログ語以外に数多くの土着語があり、その話者が英語を習得しようとする時には、Llamzonの云うタガログ語の表現形式ではなく、それぞれの土着語の形式が影響する、と主張した³⁾。従ってSt.FE をタガログ語からだけで特徴づけるのは不十分だとした。これには納得出来る側面もあるが、必ずしも充分説得力を持つ訳ではない。なぜなら、LlamzonがSt.FEを主張した時点 (1969年) とGonzalezらの指摘時期、更には、現在までの時期との間には時間的ずれがある。マスメディアの普及やBilingual政策 (1974年) のお陰で、今日では約8割程度のフィリピン人がタガログ語を理解出来るといわれている。従ってタガログ語からの干渉を中心に据えたフィリピン英語、しかもその英語はフィリピン社会で指導的役割を演じるエリート達によって使用されているという点を考慮するなら、LlamzonのいうSt.FEはフィリピン英語を代表するものとして差し支えない。このようなSt.FE の話者はフィリピン社会のエリートとして政治、経済のみでなく、マスメディアでも指導的役割を演じている。しかもマスメディアの一般社会へ及ぼす影響力の大きさを考慮する時、そこで使用されている英語は 'フィリピン英語' としての資格を得るに値すると思われる。小野原 (1995a) はそれを次のように規定した。



ここでは、タガログ語の影響を受けたLlamzon流のSt.FEは中心に位置し、それに加えてマスメディアで使用されている英語をも含む幅広い解釈が採られている。このような英語は標準アメリカ英語に馴んだエリート達でも、尚且つフィリピン流の‘香り’を漂はせているところにその特徴がみられる。即ち、タガログ語の特徴に加え、アメリカナイズを避けたり、フィリピン人としてのアイデンティティの実現や一般大衆との社会的距離感をなくす為に土着語であるタガログ語とのコードスイッチをも含んだ英語ということになる。ここでは小野原(1995a)に従い、マニラを中心に教養あるエリート達によって使用されていた英語で1950年代後半から1960年代半ばにかけてピークを迎え、マスメディアを通じて普及し、一時は、第一言語としても使用されるに至った英語⁴⁾を‘フィリピン英語’と定義する。そして、その範囲内での諸特徴を以下で眺める。但し、ここではcode-switchされた英語は扱わない。

2 音声・音韻・語彙レベルでの特徴

2.1. マスメディアに現れた英語の特徴を詳細に検討したのはGonzalez(1978,1983,1985)である。但し、これは、上の‘フィリピン英語’の定義から判断された特徴というのではない。そうではなくて、もし‘フィリピン英語’という定義がなされるとすれば、ここで提示される特徴は当然それに入る資格がある、という意味に於てである。マスメディアによるフィリピン英語の特徴の例示はGonzalez(1983)に詳しいし、それに基づいた日本語版に芝田(1990)がある。従って、ここでは重複を避ける為、そこでの例示は出来るだけ省略する。それよりも、むしろ、そのような例示を補足充実させることでフィリピン英語の特徴を更に明確にすることが必要であると思われる。

2.2. 先ず注意する必要があるのは、タガログ語を話すフィリピン英語話者(以下、F話者で表記する)が、或る種の音を発音するのが困難であるということは、彼等が物理的、生理的にその発音が不可能であるということの意味するのではない、ということである。これは我々日本人が日本語の音韻体系に欠けている音韻、例えば、声門閉鎖音を発音するのに手間どると同じ現象なのである。ただし、彼等(F話者)の発音は必ずしも全ての語彙に於て一定している訳ではない、ということも理解されるべきである。具体例を挙げよう。中・中舌非円唇母音〔ə〕がabout〔əˈbaʊt〕に於ては正しく発音されるにもかかわらずnationを発音する段になれば、[ˈneɪnsən]となり標準アメリカ英語(以下、AEで表記する)の[ˈneɪsən]のように発音されないのである。つまり〔ə〕→〔ɒ〕という変化を来たすのである。このように語彙の違いにより音韻に変化が起り発音に違いをもたらす原因を綴字発音(Spelling pronunciation)に求

めることが出来る。この綴字発音は大部分タガログ語をはじめとする土着語の綴りに従った音声体系からの持込みによる。その結果、強勢のない母音が、曖昧中舌非円唇化する‘母音縮約規則’ (vowel reduction rule) がなくなってしまう。以下、フィリピン英語の音声・音韻上の特徴を幾つかの項目に分け眺めることにする⁶⁾。

2.3. 母音

a. 曖昧母音 [ə] は [o], [i], [a], [ei], になる。

- 特定の綴り字の場合 ([ə] → [o])

綴り字が co- で始まる場合

collected Conservative

綴り字が -or / -ur の場合

actors Saturday

- 前置詞の場合 ([ə] → [a], [ə] → [o])

	F E	A E
among	[a'moŋ]	[ə'məŋ]
of	[of] 又は [ov]	[əv]

- 定冠詞 the が子音の前に現れる場合 ([ə] → [i])

the reason [di+'riyson]

- 不定冠詞 a が句結合の中で使用される場合、即ち、A E では [ə] と発音されるべき場合 ([ə] → [ei])

a popular method [ei,papyular 'meθod]

- 強勢を供なう場合 ([ə] → [a])

come [kam] discuss [dis'kas]

b. タガログ語をはじめとする全てのフィリピンの土着語にみられる [a] (低中舌非円唇音) が [æ] (低前舌非円唇音) に代る。

([æ] → [a])

acting classes happened

c. 中後舌円唇渉り母音 [ow] は [o] か [ɔ] になる。

hold [howld] → [hold] 又は [hɔld]

jumbo ['jəmbow] → ['jambɔ] 又は ['jɪmbɔ]

d. 高前舌非円唇緊張母音 [iy] は弛み母音 [i] になる

complete [kəmplyt] → [komplit]

e. [e] は -ari / -y の綴り字の時 [a] になる

agrarian [ə'greriən] → [ag'raryan]

military ['militeri] → [mili'tari]

f. 中前舌非円唇緊張母音 [ey] は弛み母音 [e] になる

available [ə'veyləbl] → [ə'veləbol]

この場合、タガログ語の音韻体系に [ey] が欠落しているという訳ではない。

発話者がrapid speechでは弛み母音〔e〕を使う傾向があるということになる。同じことは〔ey〕→〔e〕(okay)や〔uw〕→〔u〕にも見られる。

2.4. 子音

- a. 有声歯茎摩擦音〔z〕は無声音で置き換えられる。これは典型的な特徴である。

((〔z〕→〔s〕)

business observers

この置き換えは語中で起こることもあれば、より頻繁に語尾で起こることもある。特に名詞の複数形や三人称単数形を作る動詞の語尾では必ずといっていい程起こる。

advantages (複数形) sees (三人称単数形)

ところが語頭では殆ど生じない。

- b. 語頭に生じる有気歯茎破裂音〔tʰ〕は氣息を伴わない。これはタガログ語の〔t〕が無気音であるところから来る。

	F E	A E
time	[taim]	[tʰaim]
together	[tu'geder]	[tʰu'geðər]

- c. 歯間摩擦音〔ð〕,〔θ〕は歯茎破裂音に変わる。

((〔ð〕→〔d〕,〔θ〕→〔t〕,但し,〔ð〕→〔d〕の置き換えは〔θ〕→〔t〕よりもはるかに頻繁に起る。

	F E	A E
although	[ɔl'do]	[ɔl'ðow]
north	[nort]	[nɔrθ]

- d. 〔f〕→〔p〕,〔v〕→〔b〕の置き換えがある

- 〔f〕→〔p〕の場合

after if factory

- 〔v〕→〔b〕の場合

activities over November

- e. 特定の音連続 (cluster) に於て、語尾の〔t〕,〔d〕が発音されない。

- [pt(s)], [kt(s)], [çt], [ft], [št] に於ける〔t〕の場合

accept(s) aircraft

- [gd], [jd], [vd], [zd] に於ける〔d〕の場合

changed involved

- f. 語尾に来る /t/ や /d/ の音韻を欠落する傾向がある。

handicapped in many ways {handikap+in+'meni+weys}

他方, rapid speechに於て、通常A Eの母語話者には当然起こる分節音素の欠落がF Eの話者には起こらない。これは後述する‘音節リズム’によるものと思われる

	F E	A E
a reason	[ey+'riyson]	[ə'riyz(ə)n]

g. 語尾省略 (apocope) や語中音消失 (syncope) が起こる。

	F E	A E
associate	[ˈasoʃit]	[əˈsowʃiit]
radio	[ˈreyjɔ]	[ˈreydio(w)]

h. その他。[ʒ] → [ʃ], [ʃ] → [s] の変化がある。[ʒ] → [ʃ] は無声化によるし、[ʃ] → [s] は [ʃ] がフィリピン土着語にはないから [s] で置き換えることもある。

	F E	A E
illusion	[ilˈyʊwʃɔn]	[illyuwʒən]
she	[ʃiy]	[ʃiy]

2. 5. 子音・母音連音 (combination)

a. 二音節を一音節で発音する傾向がある。その結果、別の音 (大抵は破擦音) が生じる。タガログ語 (をはじめとする土着語) の音韻規則が作用する。

・破擦音化

A E	ˈreydi.ow	A E	ˈgar.di.ən
F E	ˈreyjɔ	F E	ˈgarʃan
	(破擦音化)		(綴字発音)
			(破擦音化)

・脱破擦音化と母音語中音消失

A E	ˈæk.ču.wəl		
	ˈak.ču.wəl		(綴字発音)
	ˈak.tu.wəl		(脱破擦音化)
F E	ˈak.t.wəl		(母音語中音消失)

・母音語中音消失

A E	əˈpro.pri.it		
	aˈpro.pri.eyt		(綴字発音)
	ˈa.pro.pri.eyt		(強勢移動)
F E	ˈa.pro.preyt		(母音語中音消失)

・子音化 (母音→渉り音)

A E	hyu.mil.i.ey.ʃən		
	yu.mil.i.ey.ʃən		(脱声門化)
	yu.mil.i.ey.ʃon		(綴字発音)
	ˈyumi.li.ey.ʃon		(強勢移動)
F E	ˈyumily.ey.ʃon		(子音化)

・子音脱郡化 (Declustering)

A E	i.væ.kyu.ey.ʃən		
	e.va.kyu.ey.ʃon		(綴字発音)
	ˈe.va.kyu.ey.ʃon		(強勢移動)

- 'e.va.ku.ey.ʃon (脱郡化)
 FE 'e.va.kwey.ʃon (子音化)
- b. [p (ə) l], [b (ə) l], 等の音節的子音は [pəl], [bəl] になる。
 people middle

2.6. 語強勢

- a. 最低四音節からなる -tion で終る接尾辞を供う語の中で、本来なら第二強勢が起る音節に第一強勢が起る。
 conser'vation → 'conservation
 corpo'ration → 'corporation
- b. 五音節からなる -tion を供う語も同様のルールに従う。
 associ^áation → 'association (時には、association になることもある)
 commemo'ration → kom'memoration
- c. 或る種の -tion 以外の接尾辞付き語でも同様のルールが適用される。
 compré'hensive → 'comprehensive
 presi'dential → 'presidential
- d. 通常第一強勢が第二音節に置かれる場合、本来なら第二強勢が置かれるはずの第一音節に第一強勢を移動することがある
 al'though → 'although
 an'tique → 'antique
- e. 第一強勢が第三音節に置かれるべきところを、第二強勢が置かれるはずの第一音節へ移動することがある
 conser'vation → 'conservation
- f. 第一強勢が通常第四音節に置かれるところを、第一音節又は第二音節へ移動する。その場合、どちらの音節に移動するかは第二強勢の位置によってきまる。
 confede'ration → 'confederation
 associ'ation → as'sociation
- g. その他。強勢の移動には色々な場合がある。例えば第一音節から第二音節への移動etc.
 'candidacy → can'didacy

2.7. リズムと文強勢

長さ (duration) という観点から眺める時、綴字発音とそれに伴う母音縮約規則の欠如は各音節に同じ価値を付加する。その結果、A E にみられる強勢リズム (stress-timed rhythm) に代って音節リズム (syllable-timed rhythm) が生じる。

2.8. イントネーション

- a. イギリス的上昇音調がみられる。即ち、主たる強勢音節に上昇音調が用いられ、それに後続する音節にも引きつがれる。次のニュースからの引用を眺めよう。

It's Friday night once again, and welcome to the later hour show
 この原因は専らアナウンサーが英米のアナウンサーのニュースを真似た結果であろうと思
 われる。このようなfinalイントネーションの特徴は必ずしも多くのキャスターに採られ
 ている訳でもない。

- b. 比較的長いYes-No疑問文では、上昇調のイントネーションが昇降調のイントネーション
 に移動するようにみえる。

Is acupuncture in any way similar to or a completely different thing from
 faith healing?

- c. 中から高への上昇調イントネーションをうけるWh-疑問文がある。

What is the reason for the referendum?

2.9. 語彙特徴

- a. 語、句、節、文等の後にno?が続く。このno?には二種類の高さ (pitch) がある。
 確認 (confirmation) する時はhigh pitchで、コメントする時はmiddle pitchで使われ
 る。尚、時には確認の為にmiddle pitchが使われることもある。

especially Filipino men, no?

that should have been made clear, June, no?

タガログ語と英語がcode-switchして使われる時はno?に代ってano?やhindi ba?が使わ
 れる。

- b. 前置詞の使い方が異なる。

I pick out the best in [from] the modern.

It's their turn to ask questions from [of] each other.

- c. スペイン語の影響で医者 of 男女を区別して話す時はdoctoraを使う

doctor (男) - doctora (女)

- d. alreadyの多用。タガログ語の前接詞naからの翻訳。作用、行為、活動等が完了したこ
 とを表す。

Imagine, you're already living together.

- e. タガログ語の意味を含む一風変わった (unusual) 語 (借用語)。又、タガログ語の言い方
 をそのまま英語に翻訳したものが使われる。これはLlamzon (1969) のFilipinismに当る。

aggrupation (集団)

cope up with problems (cope with problems) : cope with とkeep up with
 がblendした結果

- f. couldがcanに代って多用される。

I could probably answer that

(I can probably answer that)

- g. 他動詞が前置詞を供うことがある。

We were discussing about that.

(We were discussing that)

- h. 通常の意味とは異った意味をもつ語として使われる。

Those people, therefore, who were not able to register because of lack of forms would still have some remedy?

(Those people, therefore, who were not able to register because of lack of forms would still have another chance?)

- i. whereinに独自の使い方がみられる。

I had a patient wherein the patient could not open the door of the car.

(I had a patient who could not open the door of the car.)

- j. the oneを多用する。

Virtue should be the one to determine chastity.

- k. Yesの使い方にA Eと異なる場合がある。

It is not a total cure? Yes (it is not a total cure.)

- l. lookの後にlikeを付けることがある。

これはA Eのlook likeとまぎらわしくなることがある。

Maybe, you can give us an idea of how they look like.

(Perhaps you can give us an idea of how they look.)

- m. 否定文でalsoを使用する。

If acupuncture does not work in that particular individual, we cannot guarantee also (either).

- n. 熟語的用法をする句に於て、前置詞を省略することがある。

We would like to ask Chairman Perez a sort of a brief report on the result of the registration. (We would like to ask Chairman Perez for a sort of a brief report on the result of the registration.)

- o. etcの前にor/andを使用することがある。

whether you have been defiled through rape or etcetera, etc.....

- p. andの使用が不規則的である。

Yes, this case of Parkinson, and there is also the post CVA cases, and they respond very well.

- q. 所有格をofで表すことが多い。

There was a general belief of the people, because of a previous announcement of the president, that there will be a presidential election.

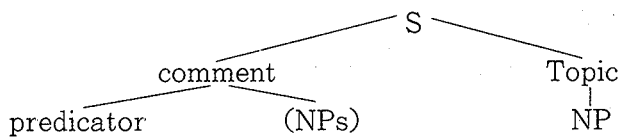
3. 統語上の特徴

3.1. 2章で取り上げた諸特徴から解ることは、タガログ語の諸形式 (form) がフィリピン英語に影響を与えているという側面も否めないが、それよりも寧ろ、タガログ語の音声、音韻等々の諸機能 (function) が、彼等の英語の形式 (form) に移行し、活用されていると云った方がふさわしい。換言すれば、タガログ語と英語は形式の上ではあまりにも大きな開きがあり、英語

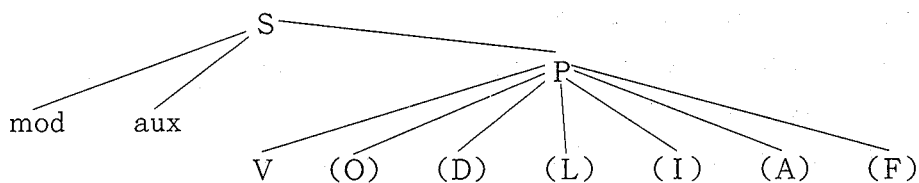
を習得する上で母語であるタガログ語の諸規則に頼ったことが原因であろうと考えられる。だからこそエリート達の発話をモデルとするフィリピン英語に於ても、そのような特徴が個人的 performanceとしてではなく、システムティックに現れているのである。

音韻レベルや語彙レベルに於けるこれら‘タガログ語の機能の移行’は統語レベルになれば決定的なものとなる。そこで、先ず、タガログ語の構造を眺めることが必要になる。

3.2. タガログ語の基本文型は Comment-Topicからなっている。Topicは一つのNPからなり Commentは一つ以上の名詞類 (nominal) を任意に供なうことが出来る predicatorとして理解される述語要素から成立つ。



Commentの中のNP_sはpredicatorと特定の格関係を持つ。又、Topicの中のNPはCommentの中のNP_sの中からTopicとして機能する為選ばれたNPである。従って、従来、伝統的に理解されている行為者 (actor) と行為 (action) との間の対立としての主語、述語の概念は通用しないし、チョムスキー流の主語、述語の関係 (S→NP+VP) も関係がない。敢えていうなら、フィルモア流の格文法の考え方に近い。フィルモアの格文法は、S→mod+aux+propという句構造規則からなり、propは動詞と、動詞の下位分類に関連している様々な名詞的要素から成っている。これらの名詞的要素は動詞と特定の格関係をもっている。図示すると次ようになる⁶⁾。



そこには文法機能としての主語もないし、述語 (predicate) ではなく命題 (proposition) という熟語が使われている。従ってタガログ語の統語構造を考える時、このフィルモア流の格文法の考え方が役立ってくる。以上を踏まえた上で、以下の統語上の特徴を眺めることにする。

3.3. F話者は次の(1), (2)の様な動詞抜き構文を用いることがある。

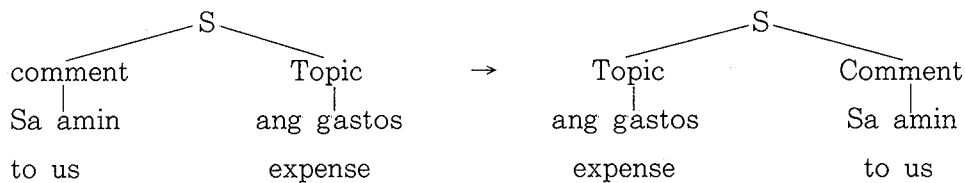
- (1) To us the expense
- (2) Teacher the woman
- (1') *The expense to us.
- (2') *The woman teacher.

一般に、文は述語的要素を中心に構成されると考えられている。英語の場合、それは動詞であ

るが、タガログ語では、それが、名詞や形容詞、副詞や前置詞等、色々な場合がある。つまり、動詞を持たない文が存在する。

sa amin ang gastos
to us expense
'The expense is to us'
titser ang ale
teacher woman
'The woman is a teacher.'

これが動詞抜き構文を生む原因だと考えられる。それでは、どうして(1)や(2)の語順をもった文になって、(1')や(2')の語順にはならないのが。それを検討する為に次の過程を眺めよう。



タガログ語には、Comment-Topicの語順が逆転しTopic-Commentという構造を生み出す統語過程が存在する。これが起これば、連結詞としてcomment markerのayが通常は入り込みその結果CommentとTopicとは区別される。

- (3) ang gastos ay sa amin
(4) 'The expense is to us.'

(1)や(2)はタガログ語のComment-Topicという語順をそのまま踏襲している。それに対し、(4)は英語の語順に従った文であり、ここでは(1)の語順が倒置されているのみならず、連結詞ayの義務的挿入による影響でisが入っている。こんな訳で、F話者は(1), (2)や(4)の文を発することがあっても、Comment-Topicの語順を逆転させたまま連結詞の入らない構造の(1'), (2')の文を発することはない。

3.4. F話者は受動態や分裂文を多用する。

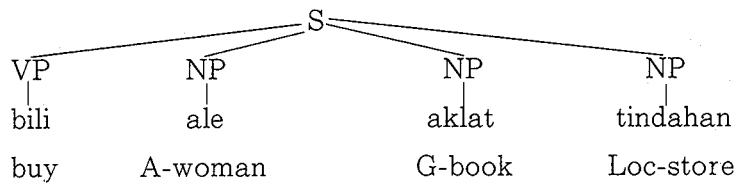
- (5) The book was bought by the woman at the store.
(6) The store was where the book was bought by the woman.

これは話題化 (topicalization) と関係する。通常、英語の話題化変形は文中の話題化したい要素 (NP) を最左方へ移行し焦点化する。その移行されたNPの後に代名詞が残る。

Salt, I like it on my watermelon.

しかし、タガログ語では、そのようなNPの左方転移ではなく、幾つかの名詞類の中の 하나가文のTopicとして選択され、Topicの位置に置かれる統語論的過程である。

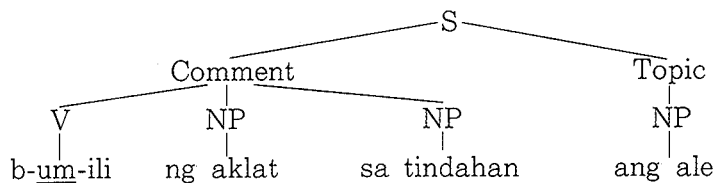
タガログ語の動詞を含む文は、動詞とそれにつづく名詞類からなる。



タガログ語では動詞は文中のNP（名詞類）との格関係を指定する接辞（接頭、接中、接尾）によってmarkされる。従って、どのNPがTopicになるかを決定するのは、接辞によってmarkされた動詞なのである。動詞**bili**の場合を例に挙げると、次のようになる。

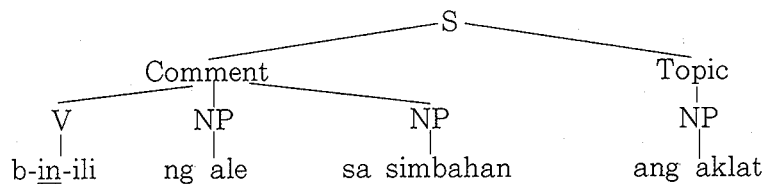
a. 接中辞-um-をとる場合

この接辞は動作主格（A:Actor）を焦点化するので、動作主格である**ale**が自動的に選択される。



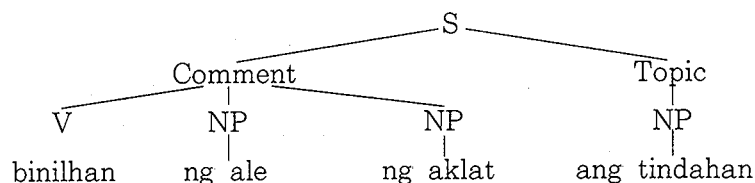
b. 接中辞-in-をとる場合

この接中辞は目標格（G:Goal）を焦点化する。
従って**aklat**がTopicになる。



c. 接尾辞-anをとる場合

ここでは場所格（Loc:Locative）が焦点化され、**tindahan**がTopicになる。



このあと、それぞれTopicとして選ばれたNPにTopic Markerである**ang**が付加される。このように、動作主格の他に、目標格や場所格も、Topicに選ばれる。即ち、タガログ語の話題化（Topicalization）は如何なるNPもTopicにすることが出来る。タガログ語の基本構造（S → Comment+Topic）に照らして、これを考慮する時、タガログ語には、他の言語に於ける主語

(actor, agent) として同定される範疇と対応する唯一の統語範疇が存在しているわけではないことが解る。つまり、これは、能格 (ergative) 言語としてのタガログ語の特徴なのである。この特徴を反映した英語表現が(5)や(6)の受動態や分裂文となって生じるのである。

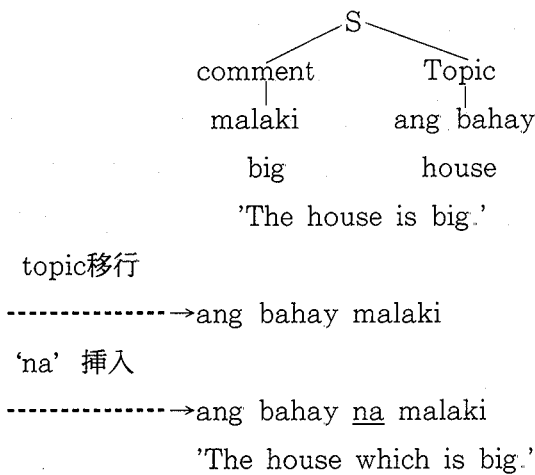
次に、小論ではタガログ語との対照的説明は省略するが、当然、タガログ語の動詞抜き構文にも話題化は存在する。この話題化された動詞抜き構文の具体的状況 (context) を述べようとする時、F話者は次のような冗長な文を作ってしまう。

What is in May is my birthday.
 The one which is in May is my birthday.

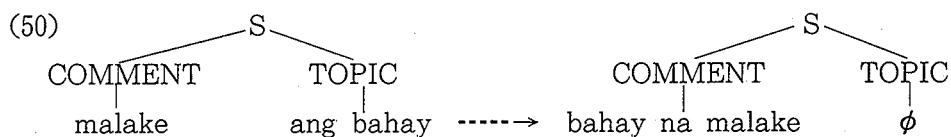
3.5. タガログ語には関係代名詞化は存在しない。従って、関係節を縮めるwh- 削除変形は適用出来ない。その結果、冗長な文を生む。

(7) I like the stand which you presented which you can do on your own.

この原因は、英語とタガログ語の関係詞化のプロセスの違いによる。即ち、英語では、先ず同一NP削除をし、その後に関係代名詞を入れるがタガログ語の関係詞化にはそれがない。そうではなく、Topicの位置にあるNPがCommentの左へ移り、次にlinker (relator) としての小詞naが挿入される。



従って、タガログ語の関係節はTopic をもたない文ということになる。



英語では関係代名詞化の為には、同一NP削除が先ず行われねばならない。それに対しタガログ語での関係詞化でlinkerとして挿入される小詞naは、TopicのNPの移行の後に起っている。この移行されたNPは同一NP削除により削除されることになるが、その前にnaは生じている。従ってそれは移行されたNP削除に置換えられたものではない。

Bumili si Juan ng bahay. Malake
 buy John house big
ang bahay.

Topic移行

-----→・・・bahay na malake

NP削除

-----→Bumili si Juan ng bahay ϕ na
malake

'John bought a house which is big.'

このようにNP削除のプロセスが英語とは異なる。即ち、関係節の作り方が異なるのである。これが(7)のような冗長な文を作る原因だと思われる。端的に云えば、タガログ語には関係代名詞化はないのである。

3.6. 一致

‘一致’にも色々あるが、ここでは‘主節と従属節の一致’と‘代名詞の性の一致’をとりあげる。

- a. Because if you are chaste, it reflects on your personality.
- b. There was widowed woman with his son named Jack.

F話者は代名詞を全て‘he’, ‘she’で表わす。時には‘them’を使うこともある。しかし、これらの‘一致’の問題は、必ずしもフィリピン英語に特徴的に現われているとは思えない。母語話者にもこのような用い方はしばしばみられる。記憶の問題、発話者の意識の変化、等、色々のcaseが考えられる。

3.7. その他

- a. 主語と動詞が間接疑問文では入れ換わる。

There have been inquiries about what will they buy from the auction sale, Commissioner.

- b. 定冠詞を頻繁に使用する。

With respect to the use of the television and radio...

定冠詞の使い方については次のc.の不定冠詞同様問題が残る。恐らくは英語教育に原因の一つを求めることが出来るかも知れない。但し、定冠詞については、先述のタガログ語のTopicと関係するかも知れない。即ち、タガログ語ではTopicは常にdefiniteで表される。

- c. suchの後の不定冠詞を落とすことがある。

Some reasons have been given as to why there is no need for such referendum [such a referendum].

- d. one ofの後に続く複数形を単数形で表すことがある。

One of the cause [causes] of separation...

e. 形容詞的語句の複数化がみられる。

It is a five-elements [five-element] theory.

おわりに

フィリピン英語を定義すればどうなるかを眺めた(第一章)。そのようなフィリピン英語は、どのような特徴を持つかを、それぞれ音声・音韻レベルから統語のレベルに至る迄例示することで、土着語、とりわけタガログ語の影響がどの程度現れているのかを見た(第二、三章)、従来、あまりみられなかった統語レベルでの対照研究を主としてJennings (1984)を援用することで実証的に提示するよう務めた(第三章)。もとより、フィリピン英語の特徴は小論で扱った範囲に留まるものではない。今後更に充実される必要があるが、ひとまず報告する。

注

1) Llamzon (1969) P.46

2) Llamzon (1985) P.103

3) Gonzalez and Alberca (1978) P. 4

4) 第一言語として使用された時期があったという事実は、'フィリピン英語'が成立していたことの証しになる。しかしこれについてGonzales (1972)は疑問を投げかけている。

5) ここでは主としてGonzalez (1985)のSpoken Philippine Englishに焦点を当てることにする。尚、音声記号はGonzalez(1985)に準拠する。即ち、以下の通り表記する。その他は国際音声記号通り。

[ei] → [ey], [u:] → [uw], [ou] → [ow], [ɔ] → [o],

[ɔ:] → [ɔ], [tʃ] → [č], [ʃ] → [š], [ʒ] → [ž], [j] → [y]

又、音節の前にある'上部の'記号〔´〕は第一強勢を、音節の前にある'下部の'記号〔,〕は第二強勢を表し、分節音の間にあるピリオド〔.〕は音節の切れ目を表す。

6) mod : 法, aux : 助動詞, P : 命題, v : 動詞

O : 対象格 (Objective)、D : 与格 (Dative)、L : 場所格 (Locative)、

I : 道具格 (Instrumental)、A : 動作主格 (Agentive)、F : 作為格 (Factitive)

参 考 文 献

- Bautista, Lourdes. 1980. *The Filipino Bilingual's Competence: A model based on an analysis of Tagalog-English code-switching*. The Australia National University.
- Gonzalez, Andrew. 1972. 'Review of Teodoro A. Llamzon's Standard Filipino English.' *Philippine Journal for Language Teaching* 7.
- _____. 1983. 'When does an error become a feature of Philippine English?' *Varieties of English in Southeast Asia*, ed. R. B. Noss, SEAMEO.
- _____. 1985. *Studies on Philippine English*. SEAMEO.
- _____ and Wilfredo Alberca. 1978. *Philippine English of the mass media*. Integrated Research Center, De La Salle University.
- Hidalgo, Cesar. 1970. 'Standard Filipino English, a review.' *Philippine Journal of Linguistics*.
- Llamzon, Teodoro. 1969. *Standard Filipino English*. Ateneo University Press.
- _____. 1986. 'Life cycle of new Englishes: Restriction phase of Filipino English.' *English world-wide* 7.
- Sibayan, Bonifacio P. 1985. *Status and Role of English and Filipino in the Philippines*. U.S. Information Agency.
- 小野原信善. 1995a. 「フィリピンの教育と英語—植民地時代から現在まで—」
『言語文化学会論集』第4号
- _____. 1995b. 「フィリピンの英語・現在の潮流—NativizationとしてのCode-Switching」
『言語文化学会論集』第5号
- 芝田征二. 1990. 「フィリピンの英語」本名信行編『アジアの英語』くろしお出版.